

## ウィリス博士縁りの地を訪ねて

— William Willis に関する記録補遺 —

松下 敏 夫

鹿児島大学医学部衛生学講座教授

### A Report on Visiting to the Connected Places with Dr. William Willis — Some Addenda of Records for William Willis —

Toshio MATSUSHITA, M. D.

Professor of Environmental Medicine, Faculty of Medicine,  
Kagoshima University, Kagoshima

ウィリアム・ウィリス (William Willis: 1837-1894) に関しては、これまで多くの優れた記録や資料がある。しかし、それらの中には、記載内容に多少食い違う点も見受けられる。後述のごとく、この度ウィリス博士縁りの地を訪れる機会を得たので、この旅の概況と、そこで得られたウィリスに関する情報を若干紹介してみたい。

#### 墓前祭と資料収集の旅の経緯

医学部教授会の決定による「英医ウィリアム・ウィリス没後100年記念顕彰事業」の企画の一環として、予てより、出来れば有志による墓前祭を行おうという話が持ち上がっていた。これは、鹿児島日英協会の松山博明事務局長を中心にした関係者の尽力によって、鹿児島日英協会と鹿児島大学医学部の企画による「エジンバラ大学と英日協会との文化交流の旅」として実現した。この主旨に賛同して参加した一行は15名であったが、当初参加を予定していたウィリスのお孫さんに当たる河内まり代さんが、健康上の理由で急きょ取り止めになってしまったのは、いささか残念であった。

一行は、1994年9月4日(日)成田を出発し、ウィリス縁りの地を訪ね、併せて墓前祭を実施した。医学部からは、佐藤榮一医学部長を始め、福田健夫教授(鹿児島日英協会副会長)、宮田晃一郎教授(エジンバラ大学との学術交流検討専門委員会委員長)及び筆者が参加した。

日程は、5日には英日協会との文化交流を行い、7日はエジンバラ大学を訪問、9日にアイルランドの首都ダブリンから、バスで北アイルランドのファーナーナ州(Fermanagh)へ行き、ウィリスが晩年住んでいた家や墓地のある教会など縁りの地を訪ね、翌10日の午後にダブリンを出発、ロンドン経由で11日(日)に成田・羽田を経て帰鹿するといったかなりのハード・スケジュールであった。

まず、英日協会との交流会は、5日の夕方、ロンドンのオリエンタル・クラブで開催された。英日協会からは、会長の元駐日英国大使・ヒュー・コータッツィ卿(Sir Hugh Cortazzi)を始め多数の参加者があり、また現地の日本人も大使館の沼田貞昭公使などが出席して、和気あいあいのうちに予定の2時間はあっという間に過ぎてしまった。

#### 関係資料の収集先

ウィリスに関する資料の収集については、まずウィリスの母校のエジンバラ大学において、昨年、1993年10月26日に鹿児島大学医学部を訪れ、同大学と鹿児島大学との学術交流について種々意見交換を行ったことのある国際交流部長のバロン博士(Dr. Tom Barron)から、ウィリス関係の資料等について種々の情報を提供してもらった。

また、ウィリスが永遠の眠りにについている墓地がある北アイルランド・ファーナーナ州・エニスキレン・フローレンスコートにあるキレシャー教会(Parish of Killesher)の司祭館(The Rectory, Florencecourt, Enniskillen, Co. Fermanagh)に住むサイズ牧師(Rev. J.R. Sides)から、大変有益な情報を得ることが出来た。

#### エジンバラ大学に保存されているウィリスに関する資料

エジンバラ大学では、バロン博士の案内で、まずサザーランド学長(Prof. Stewart R. Sutherland, FBA)を表敬

訪問した。同学長は、9月に学長に就任したばかりとのことであった。ついで、同大学の医学部長と会って今後の両大学間の学術交流について種々意見交換を行うつもりであったが、生憎、医学部長は所要のため不在で、OfficerのMs. S. M. Mackayが我々に応対してくれた。そして、これらの会見を通じて、両大学の学術交流については、今後その実績を積み重ね、近い将来の学術交流協定締結を目指すことで合意した。

ところで、エジンバラ大学に残されているウィリスに関する資料は、主として履修関係のものと卒業論文（学部のもの）の2種類で、図書館に特別展示されている（この詳細については、本誌に掲載の尾辻省悟名誉教授の論文を参照されたい）。

履修資料の関係では、まず、学籍簿、科目別の履修年（出席）表があり、また履修課程表には、氏名（William Willis）、年齢（22才）、出生地（Lenenty Fermanagh）（下線部分はスペル不明、多分County?）、エジンバラでの住所（セント・パトリック17番地：17 St Patrick Square）、履修年（科目ごとに1855-59年まで）、履修科目、担当教師名、履修学校名が記載されており、解剖学や博物学などはグラスゴー大学で履修している。

試験の成績については、最終試験に当たる第1次試験の成績に関する記録として、1859年4月25、27日に筆記試験、5月2日に口頭試問を実施し、解剖学・化学・植物学・博物学などの試験科目とその口頭試問の内容、評価などが記入され、最後に「第1次試験パス」と記載されている。また、第2次試験は、1859年7月14、15日に筆記試験、7月22日に口頭試問が実施され、その成績（法医学・産科学・外科などの試験科目、口頭試問の内容、評価）と併せて、「第2次試験パス、£20.16支払い、7月22日」と記入されており、支払われた金の一部は、TAXの支払いであるとの説明であった。

次に、現存するウィリスの「卒業論文」（1859年）の“Theory of Ulceration”（潰瘍形成論）は、36頁の手書きのものである（バロン博士の話では、当時、筆記者がしばしば雇用されていたので、筆跡はあるいは他の人の手によるものかも知れないとのことである）。なお、この論文には、“sensible essay, very fair”という評価者のコメントがついている。この論文の現物は、破損しやすく、損傷してしまうことを考えて写真に撮り、タイプすることになっているとの話で、我々が訪問した折りには、残念ながら見るができなかった（無論、エジンバラ大学の図書館を訪れば、閲覧は可能とのことである）。

我々は、大学の近くにあるウィリスが学生時代に住んでいたと思われるセント・パトリック街17番地の建物も見したが、6階建ての建物の何処に住んでいたかは不明とのことであった。

### 古都にたたずむエジンバラ大学

スコットランドの首都エジンバラは、現在約50万の人々が住み、歴史の重みを感じさせる美しい古都である。11世紀建築の歴史的な居城エジンバラ城を中心にして、16世紀の町並みが残る旧市街と、18世紀以降の建築が整然と並ぶ新市街とからなる。

エジンバラ大学は、1583年に創立された400年以上の歴史を持つ大学で、著名な歴史家のWilliam Robertsonを始め、哲学者のDavid Hume、進化論のCharles Robert Darwin、詩人のSir Walter Scott、宝島の著者Robert Louis Balfour Stevenson、シャーロック・ホームズのSir Arther Conan Doyleなど、多くの逸材を輩出している。

医学関係でも、James Syme (1799-1870) は、臨床外科教授として切断、切除手術方面で外科学に大きく貢献し、Sir James Young Simpson (1811-70) は、産婦人科学教授としてエーテル麻酔を分娩に応用、ついでクロロホルム麻酔を導入、産婦人科用器具（シンプソン鉗子など）を発明したことなどで著名であり、Joseph Lister, 1st Baron Lister of Lyme Regis (1827-1912) は、外科学教授としてパストールの業績を応用し、クレオソートを複雑骨折手術に応用し、有効主成分としての石炭酸を使用した消毒法の開拓者としてよく知られている。

この大学は、医学、法学、社会科学など8つの学部を持ち、約16,600名の学部学生と3,500名の大学院学生を擁し、世界に開かれた大学として、EC諸国を始め海外100カ国から2,500名の留学生が学んでいる（日本からは60名）。日本との関係では、藤沢薬品からの寄付で創られた薬理学研究所があり、他に日本語科（Center for Japanese）がある。

古都に実によく調和したこの大学の訪問では、我々のごく限られた訪問時間内でも、これら先人の熱い息吹きを垣間見ることができた。訪問した一行は、一様に「こんな雰囲気大学なら、誰でも勉強したくなるだろう」という感想を漏らしていた。

### 墓前祭と教会における資料

ウィリスの墓地は、エニスキレンの司祭館の構内にある。我々一行は、墓碑に生花を供え、遠路はるばる鹿児島から



持参した薩摩の焼酎をかけて霊を弔うと共に、故人の時代に想いを馳せ、偉大な功績に感謝し、その遺志を継いで医学・医療を一層発展させることを誓った次第である。

ところで、この教会には、結婚、洗礼、死亡などの記録が残されている。しかし、同牧師から頂いた資料には、ウィリアム・ウィリスに関する結婚・洗礼の記録は見いだせなかった。

村田長芳教授から良く調べてくるように申し付けられたウィリスの死亡の日付に関しては、Lancet (507: Feb. 24, 1894) の記載では、“We regret to announce that Dr. W. Willis, died at his home, Florence Court, County Fermanagh, on Wednesday, Feb. 14th.” となっており、ウィリスの命日は、従来、2月14日とされてきた。したがって、医学部の頌徳碑前で行われた同博士の没後100年記念顕彰事業の献花・追悼式も、この2月14日に実施された。

しかし、教会にある死亡記録の日付、及び Willis 一族の墓碑には、[SACRED To the memory of George Willis of MONEEN Who died 15th August 1874 aged 75 years] から始まって、[Also his wife Hannah Willis Who died 22nd December 1878 aged 67 years] に次いで、[Also their son William Willis M.D. Edin. F.R.C.S.E. died 15th Feby 1894 aged 57 years] と誌されており、サイズ牧師の意見でも、「2月15日の方が正しい」ようである。なお、教会の記録では、ウィリスの埋葬日は、1894年2月17日と記載されている。

### ウィリスが住んだ家と親族

ウィリスが晩年住んでいた家は、その頃にはさぞ荒涼としていたであろうと思われる農村地帯に、100年の歳月を経て現存している。北アイルランドのエニスキレン・フローレンスコート・モニーン (Moneen, Florencecourt, Enniskillen, Co. Fermanagh, N. Ireland) にあるこの家には、現在、ギフォード (Mr. & Mrs. Gifford) さん一家が住んでいる。建物はもちろん、間取りや室内のベッドなどの調度品も、当時のものがほとんどそのまま残されているという話であった。

なお、同じアイルランドのフローレンスコート (Drumsillagh House, Florencecourt) には、親族のルーニー (Ms. Elizabeth Rooney) さんが住んでおり、ウィリスが晩年住んでいた家で、我々一行の訪問をギフォードさん一家と共

に歓迎してくれた。

ところで、従来、アイルランドという国や、北アイルランド問題についての認識が極めて薄かった筆者は、この度の旅行を通じて、ウィリスの事のみならず、この国のカソリックとプロテスタントの歴史的な抗争を始め、多くのことを学ぶことができた。折しも、我々が北アイルランドを訪問した9月上旬は、丁度、北アイルランドの帰属に関して、従来武力闘争を行ってきたIRA（アイルランド共和国軍）が停戦を表明し、話し合いによる紛争解決の機運が見られるようになった時期であった。宗教が絡んだこの国の問題は、むろん簡単には解決し得ないであろうが、ウィリスが生まれ、喜怒哀楽を共にしたこの美しい国が、一日も早く平和を取り戻すように念じてやまない。

### 謝 辞

この度のウィリス縁りの地の訪問に当たっては、この企画に尽力された鹿児島日英協会の松山博明事務局長や旅行に参加された諸先生方を始め、エジンバラ大学のバロン博士、サイズ牧師、その他大勢の方々に大変お世話になった。また、田中信行教授のご尽力で、国際交流基金からもご援助を頂いた。ここに誌して、深く感謝申し上げたい。